

新設四年制大学における学生生活の充実度とキャリア発達

およびメンタルヘルスとの関連 (1)

高澤 健司⁽¹⁾・播磨 俊子⁽¹⁾

Study on Relation of Student Well-being with Career

Development and Mental Health in Brand-new University

TAKASAWA Kenji⁽¹⁾ and HARIMA Toshiko⁽¹⁾

This questionnaire study investigated well-being among 191 freshmen at a brand-new university. There were freshmen who had influence for well-being that they were brand-new university students. There were both positively influenced and negatively influenced group of students. The positively influenced group of students was 25% and the negatively group was 30%. They were analyzed relation between the influence and career exploration, ego identity, subjective adjustment and daily life skill with Analysis of Variable (ANOVA). The results showed that positive image freshmen had high score at adjustment, information summation, social identity and self esteem. On the other side, negative image freshmen had high score at self exploration and sensitivity. We should see freshmen from both positive side and negative side on student support.

Keywords : brand-new university, freshmen, campus life, career development, mental health

問題と目的

近年において大学における初年次教育の重要性が言われ、学士課程の初年度である大学入学初年次つまり1年生にたいする教育が重要視されている(太田 2010など)。また、「大学生」という新しい環境で、いかに大学生活に適応していくかが重要とされている。

増田(2012)は不適応の学生を減らすためにオリエンテーションの充実や大学における講義に工夫が重要としている。一方、西垣・小林(2004)は大学生活への適応には対人関係が大きな要因であるとし、所属集団への適応とともに、他者に対する自己主張などが重要であることを示している。そして、この対人関係には同期生同士である横のつながりとともに、先輩との縦のつながりも重要であるとしている。また、下村・堀(1994)は、とりわけ就職に関しては卒業生や学内の先輩からの情報を重要視している。このことは、

キャリア発達においては上級生の存在が大きな影響を与えていることを推測させる。

そこで、本研究では新設大学における創設1年目の入学生(1期生)を対象として、縦の人間関係を取り結ぶ対象であり、学生生活上のモデルや情報源ともなる上級生というモデルがない状況における大学生の学業や大学生活への意識およびメンタルヘルスの問題と、キャリアに関する意識や行動の発達との関連について検討する。

方 法

1. 調査協力者：中国地方の新設四年制大学に所属する1期生にあたる1年生204名に対して調査を行い(回収率100%)、うち回答不備等による無効回答を除く191名(男70名、女120名、不明1名)を分析対象とした(有効回答率93.6%)。平均年齢は18.9歳(標準偏差1.80)。

⁽¹⁾ 福山市立大学教育学部児童教育学科

2. 実施時期：2011年12月で、授業時間に調査用紙を配布し、回収した。

3. 調査内容

1) 新設大学であることへの意識に関する項目

①性別、年齢、居住形態、出身地域、②大学選択理由、③新設大学であることの大学選択への影響、④新設大学であることの現在の学生生活への影響、⑤新設大学であることの今後の進路への影響。

2) キャリア探索尺度（安達，2008）（5 件法）

キャリアに関する環境への探索行動である「環境探索因子」と、キャリアに関する自分への探索行動である「自己探索因子」の2 因子構成。

3) 多次元自我同一性尺度（谷，2001）（7 件法）

自己の不変性および時間的連続性についての感覚である「自己斉一性・連続性」、自己意識の明確さの感覚である「対自的同一性」、他者から見られているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致している感覚である「対他的同一性」、自分と社会との適応的な結びつきの感覚である「心理社会的同一性」の4 因子構成。

4) 学校への適応感尺度（大久保，2005）（5 件法）

周囲に溶け込み、なじめていることから生じる気楽さ、快適さ、居心地の良さである「居心地の良さの感覚」、課題や目的があることによる充実感である「課題・目的の存在」、周囲から信頼され、受容されている感覚である「被信頼・受容感」、周囲との関係による劣等感である「劣等感の無さ」の4 因子構成。

5) 日常生活スキル尺度（大学生版）（島本・石井，2006）（4 件法）

友人たちと親密な関係を維持するスキルである「親和性」、自分が所属する集団内での活動に積極的に関わっていかうとするスキルである「リーダーシップ」、時間的展望と物事の優先順位を考慮した先見的なスキルである「計画性」、相手の気持ちへ感情移入するスキルである「感受性」、情報を秩序立てて再構成するスキルである「情報要約力」、現在のありのままの自分を肯定的にとらえるスキルである「自尊心」、困難に遭遇したときでも前向きに考えるスキルである「前向きな思考」、相手に対して好ましくない印象を与えないよう意識されたスキルである「対人マナー」の8 因子構成。

各尺度の下位因子の平均点を算出し個人の得点とした。

結 果

新設大学であることが及ぼす影響について以下のような結果を得た。

1. 大学選択への影響

まず、新設大学であるということが大学選択に影響したという質問に「はい」と答えた学生は141名（74%）で、「いいえ」と答えた学生は50名（26%）であった（図1）。新設大学であることが大学選択にあたって影響があることが示された。

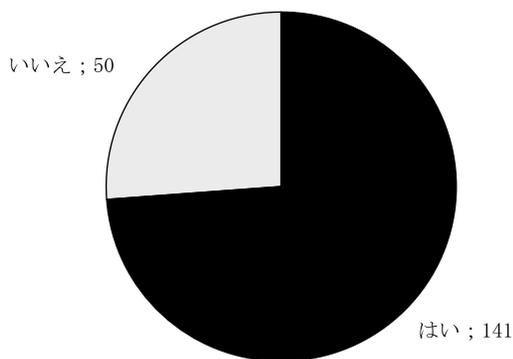


図1 新設大学であることが大学選択に影響したか

2. 大学生生活の充実度への影響

新設大学であることが大学生生活の充実度に影響しているかについて「プラス」と考えているグループ（以下、影響プラス）が47名（25%）、「影響なし」と考えているグループが85名（44%）、「マイナス」と考えているグループ（以下、影響マイナス）が58名（30%）、不明が1名であり、プラスにもマイナスにも影響していることが示された（図2）。

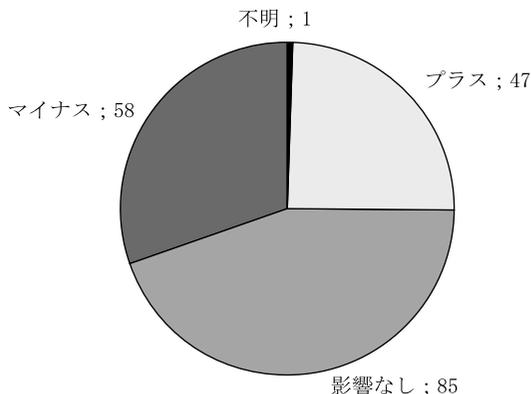


図2 新設大学であることが充実度に影響しているか

3. 大学生生活の充実度に及ぼす影響とキャリア探索、アイデンティティ、適応感、日常生活スキルとの関連

次に新設大学であることが大学生生活の充実度に及ぼす影響を独立変数として、キャリア探索やアイデンティティ、適応感、日常生活スキルの各尺度との関連を一元配置分散分析で検討した。

1) 充実度に及ぼす影響とキャリア探索

キャリア探索尺度との関連では、自己探索因子において影響なしよりも影響マイナスの得点が有意に高かった ($F=4.47, df=2,187, p<.05$) (表1)。新設大学であることが大学生生活の充実度にマイナスの影響と考えるグループの方が自己探索的傾向にあることが示された。その一方で、環境探索因子においては有意差が見られなかった。

表1 大学生生活の充実度別キャリア探索尺度の平均値

	プラス	影響なし	マイナス	
環境探索	2.89(0.66)	2.61(0.77)	2.81(0.67)	ns
自己探索	3.52(0.83)	3.22(0.75)	3.57(0.66)	* マイナス>なし

カッコ内は標準偏差 *** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ ns: not significant

2) 充実度に及ぼす影響とアイデンティティ

アイデンティティとの関連では、心理社会的同一性因子において、影響プラスの方が影響マイナスの得点よりも有意に高く ($F=4.66, df=2,186, p<.05$) (表2)、新設大学であることが充実度にプラスに影響と考えるグループの方がアイデンティティの感覚が高いことが示された。

斉一性・連続性因子、対自的同一性因子、対他的同一性因子においては有意差が見られなかった。

表2 大学生生活の充実度別多次元的自我同一性尺度の平均値

	プラス	影響なし	マイナス	
斉一性	4.80(1.35)	4.62(1.26)	4.56(1.26)	ns
連続性	4.07(1.25)	3.81(1.14)	3.81(1.04)	ns
対自的	4.04(1.06)	4.00(1.02)	3.97(1.14)	ns
対他的	4.37(1.05)	4.04(0.80)	3.84(0.86)	* プラス>マイナス

カッコ内は標準偏差 *** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ ns: not significant

3) 充実度に及ぼす影響と適応感

適応感との関連では、課題目的の存在因子において影響プラスの方が影響なしや影響マイナスの得点よりも高く ($F=7.03, df=2,186, p<.01$)、また被信頼・受容感因子において、プラスの方が影響なしと考えるグループの得点よりも有意に高かった ($F=3.37, df=2,186, p<.05$) (表3)。

新設大学であることが充実度にプラスの影響と考えるグ

ループに大学生生活での課題目的を見つけ、受容されている感覚が高いことが示された。

居心地の良さ因子、劣等感の無さ因子では有意差が見られなかった。

表3 大学生生活の充実度別適応感尺度の平均値

	プラス	影響なし	マイナス	
居心地の良さ	3.89(0.56)	3.67(0.73)	3.77(0.87)	ns
課題目的の存在	3.85(0.59)	3.52(0.78)	3.38(0.78)	** プラス>なし, マイナス
被信頼受容感	3.18(0.78)	2.83(0.74)	2.91(0.77)	* プラス>なし
劣等感の無さ	3.21(0.71)	3.20(0.71)	2.98(0.70)	ns

カッコ内は標準偏差 *** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ ns: not significant

4) 充実度に及ぼす影響と日常生活スキル

最後に、日常生活スキルとの関連では、感受性因子において、影響マイナスの得点が影響プラスより高く、さらに影響プラスの得点が影響なしの得点よりも有意に高かった ($F=16.07, df=2,186, p<.001$)。また、情報要約力因子では、影響プラスの得点が影響マイナスの得点よりも有意に高かった ($F=.85, df=2,187, p<.05$)。そして、自尊心因子では、影響プラスの得点が、影響マイナスや、影響なしの得点よりも有意に高かった ($F=5.53, df=2,185, p<.01$) (表4)。

感受性因子においては、新設大学であることが充実度に影響なしと考えるグループの得点が最も低く、マイナスの影響があると考えるグループの得点が最も高いことが示された。また、情報要約力因子や自尊心因子で、新設大学であることが充実度にプラスの影響があると考えるグループは、マイナスの影響があると考えているグループより得点が高いことが示された。

親和性因子、リーダーシップ因子、計画性因子、前向き思考因子、対人マナー因子においては有意差が見られなかった。

表4 大学生生活の充実度別日常生活スキル尺度の平均値

	プラス	影響なし	マイナス	
親和性	2.93(0.71)	2.80(0.60)	2.94(2.94)	ns
リーダーシップ	2.43(0.70)	2.30(0.58)	2.29(0.68)	ns
計画性	2.48(0.67)	2.36(0.49)	2.22(0.57)	ns
感受性	2.91(0.45)	2.67(0.57)	3.17(0.48)	*** マイナス>プラス>なし
情報要約力	2.54(0.50)	2.34(0.56)	2.25(0.58)	* プラス>マイナス
自尊心	2.60(0.57)	2.33(0.56)	2.22(0.65)	** プラス>なし, マイナス
前向き思考	2.59(0.63)	2.50(0.56)	2.46(0.69)	ns
対人マナー	3.23(0.53)	3.08(0.52)	3.19(0.56)	ns

カッコ内は標準偏差 *** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ ns: not significant

考 察

上級生というモデルがない状況における大学生の学業や大学生活への意識とメンタルヘルスの問題と、キャリアに関する意識や行動の発達との関連について検討することを目的とし、新設大学における創設1年目の大学生を対象に質問紙による調査（新設大学であることへの意識に関する質問項目と、キャリア探索尺度、多次元自我同一性尺度、青年用適応感尺度、日常生活スキル尺度で構成）を実施した。これにより、新設大学であることが大学生生活の充実度に影響していると考えているかどうかと各尺度の構成因子との関連について結果を得た。

ここではプラスの影響を及ぼしていると考えているグループと、マイナスの影響を及ぼしていると考えているグループについて、他グループとの得点差が明らかな各尺度の構成因子に注目しながら考察する。

1. プラスの影響を及ぼしていると考えているグループの特徴

プラスに影響していると考えているグループは、多次元自我同一性尺度の心理社会的同一性因子の得点が他のグループより高い。この因子は自己と社会とのつながりの中でアイデンティティ感覚を得られることを示す因子である。また、青年用適応感尺度の課題目的の存在因子の得点が他のグループよりも、被信頼・受容観因子の得点がマイナスの影響とと考えているグループよりも高いこと、さらに日常生活スキル尺度の自尊心因子の得点で他のグループよりも、情報要約力因子の得点でマイナスの影響と考えるグループよりも高い。

こうした点を考えあわせると、このグループは先輩がない状況の中に自分を生かす状況を見出し、新設大学であるが故に先輩や伝統に影響されずに自ら情報を手に入れることができること示された。このことが大学生生活の充実感につながり、自尊心に反映されていることを推測することができる。

2. マイナスの影響を及ぼしていると考えているグループの特徴

マイナス影響を及ぼしていると考えているグループは、日常生活スキル尺度の感受性因子の得点で他のグループより得点が高い。また、キャリア探索尺度の自己探索因子の得点が、影響なしと考えているグループの得点より高く、環境探索因子には差がみられない。自己探索因子の得点の高さは、このグループが充実感にとってネガティブに感じられている環境の中で、今後に向けて自分の在り方を考え

ることで方向を見つけていこうとしている姿勢を示唆している。

また感受性因子は「困っている人をみると援助をしてあげたい」といった項目を含む因子で、適応感尺度における居心地の良さ因子や劣等感の無さ因子の得点には各グループ間の差がないことを併せ考えると、このグループは、向社会性の高い学生が、先輩や伝統といった行動の指標が少ない新設大学故の環境の中で自他の学生生活の在り方を模索していることを反映する結果とも考えられる。

3. まとめ

本研究の結果を総合すると、新設大学であることは、大学選択に少なからず影響を与えていたこと、大学生生活の充実感への影響に関しては、プラスの影響があると考えている学生もマイナスの影響があると考えている学生もいるということから、両価的であることが示された。

また、新設大学であることが充実度にプラスの影響があるとした学生の傾向として、課題目的の存在や情報要約を自ら行うという因子の得点が高く、信頼されている感覚や社会的なアイデンティティの感覚、そして自尊心の高さが反映されていることが明らかとなった。

それに対してマイナスの影響とと考えている学生は、自己探索志向や感受性が高い傾向が見られた。つまり、自分のあり方や大学生活の過ごし方について模索している状態にあるとも推測でき、そのことは青年期のあり方として必ずしも否定的な状態とはいえない。

以上のような点から、今後の学生支援では新設大学に対する学生の受け止めのポジティブな側面とともに、表面的にはネガティブに見える点にも着目し、これを否定的にとらえるだけではなく、その学生たちの模索を見守り支援する体制を構築していくことの必要性が示唆されたといえる。また、入学初年次に魅力ある課題設定を提示できるかどうか、学生が自らの存在を認められていると感じられる指導システムや対人関係構築の機会が提供されているかどうか重要な点として示唆されているといえる。

今後の課題

今後の課題として、新設大学に学ぶことの影響は、大学卒業まで続くことであり、卒業までにどのような影響を及ぼしていくのかについて経時的に追跡検討し、その様相を検討・分析することが必要である。同時に、本研究では質問紙による量的な検討を試みたが、学生生活支援の具体的なあり方を検討する上では、面接調査等を通じて、質的な検討をすることも必要であろう。

引用文献

- 安達智子 (2008) 女子学生のキャリア意識－就業動機, キャリア探索との関連－ 心理学研究, 79 (1), pp.27-34.
- 増田健太郎 (2012) 大学生の大学適応を考える 大学生の主体性を取り戻すために 教育と医学, 706, pp.20-31.
- 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因－青年用適応感尺度の作成と学校別の検討－ 教育心理学研究, 53, pp.307-319.
- 太田弘一 (2010) 初年次教育の意義と課題 教養と教育, 10, pp.41-55.
- 西垣順子・小林正信 (2004) 大学生活への適応状況に関連する要因についての調査 信州大学教育システム研究開発センター紀要, 10, pp.25-35.
- 島本好平・石井源信 (2006) 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究, 54, pp.211-221.
- 下村英雄・堀洋道 (1994) 大学生の職業選択における情報収集行動の検討, 16, pp.209-220.
- 谷冬彦 (2001) 青年期における同一性感覚の構造－多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成－ 教育心理学研究, 49, pp.265-273.

本研究は福山市立大学教員研究費 (重点) (2011, 2012年度) の助成を受けて実施された。

(2012年11月20日受稿, 2012年11月30日受理)